

【要旨】 チベット初期中観思想における二諦説^{*} —トルンパとギャマルワの二諦を巡る論争—

西 沢 史 仁

チベットにおける中観思想の形成とその歴史的展開を考える上で、インド中観思想のチベットへの導入とその確立に直接的に関与した初期チベット人学者の業績と貢献は極めて大きな位置付けにある。しかるに、その重要性にも関わらず、資料的に大きな制約事情があったため、彼らの教学の内実についてはこれまでごく限定的な情報しか得られるところがなかった。そのため、11-12世紀を中心とする後伝期初頭の初期チベット人学者の教学は、インドからチベットへ至る仏教思想史において、ある種の空白期間に位置付けられており、インド後期の仏教思想と後代のサキャ派やゲルク派等のチベットの諸宗派の教学を繋ぐ《ミッシング・リンク》的な役割を担っている。しかるに、2006年に『カダム全集』の刊行が開始されたことを契機として、初期チベット人学者達の多くの著作が利用可能な状態となり、資料状況が一変した。そのような状況を受け、本稿では、11-12世紀頃にサンブ寺で活躍した初期チベット人学者の中から、特にトルンパ・ロトウジュンネー (Gro lung pa Blo gros 'byung gnas) とギャマルワ・チャンチュプタク (rGya dmar ba Byang chub grags) の原典資料を取り上げ、中観思想の中枢である《二諦説》を主題として、テキスト校訂・翻訳・内容分析を行うことを通じて、これまで殆ど知られてこなかったチベット初期中観思想の内実¹に光を当てることを目的とする。この両者を取り上げたのは、彼らの間に起こった二諦説を巡る論争を契機として、サンブ寺において、二つの相反する中観説の学統が起り、それが後代のサキャ派やゲルク派の中観思想形成に大きな影響を及ぼしたと推定されるからである。

既に、2017年の第65回日本チベット学会において、筆者は、ギャマルワが彼

^{*} 編集委員会注 本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ (<https://otani.repo.nii.ac.jp/>) の以下の URL に掲載。http://id.nii.ac.jp/1374/00007645/

の『二諦分別論解説』においてトルンパの『教次第大論』に見られる二諦の定義を引いて批判したことを明らかにしたが（西沢 2018a）、ギャマルワのトルンパ批判は、それに留まらず、二諦説の全般に渡っていることが本稿において確認された。即ち、ギャマルワは、明らかにトルンパの『教次第大論』を見ており、『二諦分別論』の註釈を著すに際して、『教次第大論』に見いだされる二諦説を批判的に検討することを通じて自身の二諦説を打ち立てたのである。本稿で明らかとなった両者の解釈の異同を一覧にして示すならば、以下の通りである。

図. 二諦説に関するトルンパとギャマルワの解釈の異同一覧

主題	トルンパの解釈（『教次第大論』）	ギャマルワの解釈（『二諦ギャ註』）
語義	<ul style="list-style-type: none"> • 世俗諦の語義：世俗、即ち、迷乱知 (khrul ba'i blo) の思考の力により／の側において真実であるので、「世俗諦」と云われる。[609.10-22] • 勝義諦の語義：(1)勝義、即ち、実性を認識する正理知 (de kho na'i 'jal byed rigs pa'i shes pa) の側において真実であるので、「勝義諦」と云われる。それは、正理 [知] により成立する真実 (rigs pas grub pa'i bden pa) である。(2)あるいは、正理知の対象である空性もまた「勝義」と云われる。[609.22-610.3] 	<ul style="list-style-type: none"> • 世俗諦の語義：世俗、即ち、迷乱知 (khrul ba'i blo) の思考により／の側において真実であるので、「世俗諦」と云われる。[8b3f.] • 勝義諦の語義：勝義、即ち、正理知 (rigs pa'i shes pa) の側において真実であるので、「勝義諦」と云われる。それは、正理により存立する対象 (rigs pas gnas pa'i don) である。[8b4f.]
分類基体	<p>一切の知と所知の対象 (shes pa dang shes bya'i don mtha' dag) (=所知のみ) [610.13f.]</p> <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、二諦の分類基体は存在しない。]</p>	<p>所知のみ (shes bya tsam) [7a3]</p> <p>[註. トルンパの言説の立場の解釈を自説として受容する。]</p>
分類の意味	<p>同じものとも他のものとも言表されることがないもの (de nyid dang gzhan du brjod du med pa): 同一が否定されただけの別異 (gcig pa bkag pa tsaṃ gyi tha dad) [610.18f.]</p> <p>[註. 勝義諦を所知と見なさないの、世俗諦と同一とも別異とも立てない。その関係を表現するものとして、〈同一が否定された別異〉という独特な概念を使用する。『解深密経』所説の二諦の同一と別異を否定する議論では、自体と反体の区別を立てず、全て自体に結び付ける。]</p>	<p>同じもの (=同一反体) としても他のもの (=別異自体) としても存在しない有法と法性 (de nyid dang gzhan du med pa'i chos can dang chos nyid) (= * 同一自体にして別異反体 (ngo bo gcig la ldog pa tha dad)) [8b2]</p> <p>[註. 同経の議論において、自体と反体の区別を立て、別異を否定する場合にはトルンパ同様に自体に結び付けるが、同一を否定する場合にはトルンパの解釈を批判して、反体に結び付ける。]</p>

数の確定	<p>矛盾していることそれ自体によって、対象は真実（＝勝義諦）と虚偽（＝世俗諦）、知は迷乱不迷乱の二つに確定される。その両者は、〈相互に単一の理解の対象（phan tshun rtogs pa gcig gi yul）〉である。[611.21-612.8]</p> <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、二諦の数の確定は存在しない。]</p>	<p>知が迷乱知と不迷乱知（＝正理知）の二つに確定されることと、対象が二諦に確定されることは、〈単一の理解の対象〉であり [8b6]、存否を共にするもの（grub bde gcig pa, *ekayogakṣema）である。[9b3f.]</p> <p>[註. トルンパの言説の立場の解釈を自説として受容する。]</p>
定義	<ul style="list-style-type: none"> ・世俗諦の定義：顛倒 [知] の所縁 (phyin ci log gi dmigs pa) [615.20] ・勝義諦の定義：一切の顕現を超えたもの (snang ba thams cad las 'das pa); 所知の相から離れたもの (shes bya'i mtshan ma dang bral ba); 一切の自性から離れたもの (rang bzhin thams cad dang bral ba); * 五相 (無戲論 (spros pa med pa) ・無二 (gnyis med pa) ・無相 (mtshan nyid med pa) ・非事物 (dngos po med pa) ・空 (stong pa)) [614.13-615.2] <p>[註. 真実としては勝義諦は所知ではないので、勝義諦の定義は存在しない。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・世俗諦の定義：そのように（＝正理により）考察するならば存立しない所知 (de ltar (i.e., rigs pas) dpyad na mi gnas pa'i shes bya) [10a2] ・勝義諦の定義：[正理により] 考察せずに顕現のみとして働く知（＝世俗の知）の対象より他のものとして存立する対象 (ma dpyad par snang pa tsam du 'jug pa'i yul las g[zhan du/par] gnas pa'i don) (= *正理知の対象 (rigs shes kyi yul)) [10b1f.] <p>[註. トルンパの二諦の定義を引いて一応「正しい」と称しつつも実際には批判する。]</p>
認識手段	<ul style="list-style-type: none"> ・勝義諦の定義を確定する認識手段：(1)彼岸をご覧になる者達（＝聖者）の無顕現の智である瑜伽行者の直接知覚と、(2)此岸を見る者達（＝凡夫）の増益を否定する離一多等の証因に基づき働く推論の認識手段 [616.9-11] ・世俗諦の定義を確定する認識手段：推論により行が堅固にされた直接知覚 [616.12-14] <p>[註. 真実としては、勝義諦は所知ではないので、二諦の定義を確定する認識手段は存在しない。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・勝義諦の定義を確定する認識手段：(1)無顕現の智である直接知覚の認識手段か、あるいは、(2)離一多等の証因により確定する推論 [10b5] ・世俗諦の定義を確定する認識手段：(1) [壺等が] 考察するに耐えるものであることを否定する正理知と、(2) [壺等を] 顕現分として設定する考察しない認識手段（＝言説の知）の二つ [10b6] <p>[註. 勝義諦の定義を確定するものについては、トルンパに随順。世俗諦のそれは異なる解釈を提示。]</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・SDV 3cdに基づき、勝義諦は知に顕現せず、一切の知や言説の対象を超えたものと解する。 ・勝義諦に関する上記一連の規定は言説として認められるに過ぎず、勝義としては否定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SDV 4及びその自註に基づき、勝義諦を正理知の対象と認める。 ・トルンパのように二諦のレベルの差を立てずに、概してトルンパの言説の立場の解釈を自説として認めるが、勝義諦を正理知の対象として存在すると認めるので、トルンパがそれを勝義の立場から否定する点は批判する。

トルンパとギャマルワの二諦説に関する論争の争点となったのは、ひとえに、空性（＝勝義諦）を如何に解釈するのかという問題であった。両者の二諦説の一連の主題に関する解釈の相異は両者の空性理解の相異に起源している。トルンパは、言説の立場では、空性を正理知の対象として認め、それに依拠して、二諦の語釈、分類基体、数の確定等を設定したが、真実としては、空性を、一切の知や言語表現を超えたものと捉えた。それ故、トルンパにとっては、空性は知の対象として存在するものではなかった。既に指摘したように、このような空性理解は、ゴク翻訳師の『甘露一滴』にも見いだされるものであり、ゴク翻訳師及びその直弟子達の間で広く受け入れられていた解釈かと思われる。

これに対して、ゴク翻訳師の四大弟子の一人であるキュン・リンチェンタクの弟子筋に当たるギャマルワは、空性は真実として正理知の対象であり存在するものと解釈し、それを勝義の立場から否定するトルンパの解釈を批判した。このギャマルワの解釈は彼の直弟子のチャバにも受け継がれ、ここに、チベットの中観説の学統において、空性を知の対象と見なさない学統とそれを知の対象と見做す学統の二つが生じ、それが後代のゲルク派やサキヤ派等の中観説の異なる起源となったのである。後代、ゲルク派とサキヤ派の間に、特に空性理解を巡って激しい論争が展開したが、その起源は、実に、このトルンパとギャマルワの論争に遡ることが出来る。

さらに、トルンパとギャマルワの解釈が分かれることになった文献上の起源は、一連のインド原典の中でも、特に、『二諦分別論』であることが再確認された。即ち、『二諦分別論』に見られる二種類の異なる二諦の設定のうち、顕現の有無に応じて二諦を分ける SDV 3cd に見られる規定に立脚するか、あるいは、有欺と無欺の点から二諦を分け、正理知及びその対象を勝義と認める SDV 4 及びその自註の規定に立脚するかで、トルンパとギャマルワは解釈を異にしたのである。このうち、ジュニャーナガルバの密意は、SDV 3cd に見られるように、勝義諦を一切智者の知を含め如何なる知にも顕現しないものとする解釈にあり、SDV 4 に示された勝義の規定は、相応する勝義、即ち、仮の勝義の規定であった。それ故、ジュニャーナガルバの密意に随順するのは、端的にはゴク翻訳師・トルンパ師弟の解釈である。しかるに、興味深いのは、ギャマルワは、そのことを知悉していたにもかかわらず、敢えてジュニャーナガルバの密意に反して、SDV 4 及びその自註に立脚して自らの二諦説を構築した。その背景に

如何なる理由があったのかということはギャマルワの二諦説の本質にかかわる重要な問題である。

最後に、トルンパとギャマルワの思想的立場については、共に中観説に立脚することが確認されたが、その解釈には大きな隔たりがあることもまた判明した。即ち、トルンパは、師であるゴク翻訳師の解釈を受け継ぎ、如来蔵思想に基づく中観説を提示したが、これに対して、ギャマルワの中観説には、そのような如来蔵思想的な傾向は見出されず、むしろ、知と対象の設定については、毘婆娑師と一致する立場であることが確認された。これは、ギャマルワ自身の学説分類によれば、外界実在論と一致する中観派であり、その中でも特に、「毘婆娑師の如く主張する者」と云われるものの説である。このような両者の学説の違いが、先に言及した『二諦分別論』の解釈の相異と全く無関係であったとは考え難い。端的に言えば、ギャマルワは、毘婆娑師説に立脚して、知と対象の設定を立てたからこそ、空性を正理知の対象として設定したのに対して、トルンパは、空性とそれを理解する知が無差別に混じり合った境地を法身とし、それを如来蔵と同一視する立場から、空性を知の対象ではなく一切の知の顕現を超えたものと規定したと推定される。空性を理解する知が空性と無差別に混じり合い、知と所知が「一味 (ro gcig, i.e., 同体)」となったのであれば、空性をその知の対象として立てることは不可能であるからである。このように、両者の中観説については、論ずべきことは多々あるが、その委細については、稿を改めて検討することにした。

*本稿は、JSPS 科研費 JP15K02046の助成に基づく。

